

市民としてのコミュニケーション能力を スポーツを通じて育成するための基礎的研究

—チーム内コミュニケーション能力の育成によるスポーツ振興を目指して—

小林勝法*

岡田光弘** 檜田美雄*** 真鍋陸太郎****、小泉英樹*****

抄 録

スポーツ振興の基礎として、コミュニケーション能力の高い人材の育成が必要である。そして、スポーツを経験することはコミュニケーション能力を養う。本研究では、こうした前提に基づいて、チーム内で立ちあらわれるコミュニケーションについて経験的な研究を行なった。ビデオ・エスノグラフィーという研究手法を用い、実際のスポーツ場面でのコミュニケーション（スポーツ・コミュニケーション）を録音・録画し、書き起こし、それに基づいて検討した。その結果、チーム内のコミュニケーションに見られる「理解の主張」と「理解の達成」の姿を浮き彫りにすることができた。これは、スポーツ・コミュニケーションを見るときのひとつの重要な視点である。今後は、こうした視点から、スポーツ・コミュニケーションについてのデータをさらに蓄積し、分析すること、そして、それに基づいて、コミュニケーション能力を育て、スポーツ振興をはかることを提案する。

キーワード：

スポーツ・コミュニケーション，フィールドワーク，ビデオ・エスノグラフィー，会話分析，理解の達成

* 文教大学国際学部 〒253-8550 神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

** 国際基督教大学教育研究所 〒181-8585 東京都三鷹市大沢3-10-2

*** 徳島大学大学院ソシオ・アーツ・アンド・サイエンス研究部
〒770-8502 徳島県徳島市南常三島町1-1

**** 東京大学大学院工学系研究科 〒113-8656 東京都文京区本郷7-3-1

A Research for the Development of the Ability to Communicate Well as a Good Citizen through Sports

—For the development of sports by facilitating sports-communication—

KOBAYASHI, Katsunori *
OKADA, Mitsuhiro** KASHIDA, Yoshio****
MANABE, Rikutarō****. KOIZUMI, Hideki****

Abstract

Our main idea is that we need to facilitate the ability of sports-communication for the development of sports. The purpose of this study is to show how sports communication is accomplished in Jr. Soccer team. Because for the development of sports, it is critical to know what the ordinary sports communication is. For this purpose, descriptive study of sports communication should be done. So we have done the kind of field research called Video-based-ethnography. By video-recording of pre-match meeting, physical preparation, match itself, half time meeting, after match meeting etc., transcribing them and discussing them with participants and other authorities, we can suggest that in sports communication, the difference between the achievement of understanding and the claim of understanding is very significant. But further empirical studies are required to utilize this finding for the development of sports.

Key Words : Sports-Communication , Fieldwork , Video-based-Ethnography ,
Conversation Analysis, Achievement of understanding,

*Faculty of International Studies, Bunkyo University.

〒253-8550 Kanagawa, Chigasaki Yukigaya 1 1 0 0

**Institute for educational Research and Service, International Christian University.

〒181-8585 Tokyo, Mitaka, Oosawa 3-10-2

***Institute of Socio-Arts and Sciences. The University of Tokushima.

〒770-8502 Tokushima, Tokushima, Minamijyosanjima 1 - 1

***Department of Urban Engineering. The University of Tokyo.

〒113-8656 Tokyo, Bunkyo, Hongo 7 - 3 - 1

1. はじめに

本研究は、スポーツ振興の基礎となる人材の育成に向けて、スポーツ実践の現場でのチーム内のコミュニケーションの実態とそこに埋め込まれた個人の創発性の実態を解明しようとして計画された。

コミュニケーション能力の育成にはスポーツの経験が役に立つ。スポーツで養われるコミュニケーション能力（スポーツ・コミュニケーション能力）があるとも思われているが、その実態は十分に明らかにされてこなかった。

これまで、体育・スポーツの領域でコミュニケーションを科学的に把握し、分析する手法は、分類の枠組みをあらかじめ設定し、参加者の活動を分類するといったものであった。この手法は、授業中の児童生徒の活動を、さらには授業そのものを評価することを目的としており、実態の把握そのものを目的としていない。すなわち、これまでは、スポーツ・コミュニケーションの実態の把握それ自体を目的とした研究が、ほとんど行われてこなかったということである。われわれは、スポーツ振興のためには、特定の分類枠組みに従った評価的な研究やアンケート調査によって意見を集めるだけでなく、基礎的な資料となる現場でのコミュニケーションの実態の把握が必要だと考えた。

さらに、競技力向上のために養成されているコミュニケーション能力は、市民として求められる能力とも強く結びついているのではないか。そして、スポーツ振興の礎は、この能力の育成にあるのではないか。本研究は、こうした発想に基づいて計画された。

スポーツ場面のコミュニケーションは3つの側面から捉えることができる。それらは、第1側面：個人技能の育成、第2側面：戦術トレーニング、第3側面：チーム内コミュニケーションに基盤をおいた個人の創発性の育成である。この3側面のうち、第1側面の技能と第2側面の戦術に主眼をおいた指導がよく行われている。第1の側面は、身体的な訓練を重視する行動主義的な学習論に結びついている。第2の側面は、表象とその操作を重視する情報処理モデルと整合的である。それに対して、近年、コミュニケーションの研究には、実際の相互行為が生み出されている文脈を重視し、相互行為を取り巻く他者や人工物といったリアルな社会・文化的状況を考えに入れた状況（論）的な学習論に基づく必要があると言われるようになってきている（松田・山本 2001）。

しかし、これまでわが国の研究においては、実際のコミュニケーションの状況での個人の振舞い（創発性や自立性の発露）という視点に基づいた第3側面の育成の基礎研究が不十分である。このため、実際のスポーツ振興に結びつくようなデータが得られてこなかっ

た。この面の研究の蓄積は急がれる課題である。例えば、チーム内コミュニケーションを分析を通して、「自主的な判断」が他者の「自主的な判断」と協調し、スポーツ実践を組み立てているのかを解明することがあげられる。

本研究は、基礎的研究であるが、その成果の応用としては、子ども・青少年スポーツのそれぞれの種目に応じた、体系的なコミュニケーション指導への示唆が得られると考えられる。さらにこうしたコミュニケーションの能力は、市民として求められる能力そのものであり、コミュニケーション能力の高い人づくりはスポーツ振興の礎になるだろう。

2. 目的

本研究は、スポーツ振興の基礎となる人材の育成に向けて、スポーツ実践の現場でのチーム内のコミュニケーション（スポーツ・コミュニケーション）の実態とそこに埋め込まれた個人の創発性の実態を解明することを目的としている。

さらに具体的な目標は、どのような、発話や行動が、他者の発話や行動と協調しながら、スポーツにおけるコミュニケーション実践を組み立てているのかを具体的なエピソードとその社会的な分析として示すということである。これによって、個々のスポーツ実践によって、具体的に、どのようなスポーツ・コミュニケーション能力が身につくのか、その一端を明らかにしたい。

3. 方法

スポーツ・コミュニケーションについてその実態を把握するためにビデオ・エスノグラフィーという手法を用いて研究を進める。この手法は社会学における質的研究の手法であるエスノメソドロジー／会話分析を基礎に持っている（前田・水川・岡田 2007）。

具体的には東京都練馬区の大型団地内にある小学生の地域サッカークラブを対象とし、練習試合前や練習試合中、ハーフタイム、試合終了後の反省会までのコミュニケーションの様子を複数の方向から撮影し、当事者や研究者と映像を見ながらディスカッションを行った。さらに会話についてはデータを文字起こしして、それと画像を対応させながら、分析を進めた。

ビデオ・エスノグラフィーにおいては、特に特定の仮説を設けず、観察を行い、数多くのディスカッションを通じて、そこで起こっていることを明らかにするかたちで記述的に研究を進めていく。この手法は、コミュニケーションの実態を把握するためにきわめて有効である。

具体的な研究の手続きとしては、はじめに研究対象のサッカークラブについてフィールドワークを行い、いくつかの観察のポイントを抽出した（後述）。次に、地域の公式試合を複数のカメラによって撮影し、スポーツ・コミュニケーションのデータを収集した（2012年1月9日）。ビデオカメラなどの機材の多くは、すでに徳島大学と東京大学で使用しているものを用いた。撮影には固定カメラ3台と移動式カメラ2台を使用し、撮影後すぐに、カメラに割り振られた番号をもとに、撮影状態や撮影時間の確認と整理を行った。

なお、撮影に当たっては、保護者に研究の内容及びデータは研究の目的以外には使用しないこと、そして、研究倫理に基づいて管理することについて説明した後、協力を求め、書面で同意を得た。なお、調査で撮影された画像データの利用範囲について、具体的に定めているのがアンケート調査との相違点である。

*調査対象とした少年サッカーチームの概要

練習は、ほぼ毎週末（土曜日と日曜日）、地域の小学校で行われている。練習場所は固定されているが、チームにはその小学校以外の児童も参加することができる。練習は、1年生(9名)と2年生(18名)のキッズ、3年生(11名)と4年生(20名)のジュニア、5年生(15名)と6年生(10名)のレギュラーに分けて行われている。

練習時間は、8:30~11:00（奇数月）、11:00~13:30（偶数月、ただし、土曜日は、11:00~14:00）である。通常は、レギュラーがコート半面を使い、それ以外の場所で、ジュニアとキッズが練習する。また、レギュラーが一面を使いゲーム形式の練習を行うこともある。

練習内容は、概ね以下の通りである。

- ①用具の準備
- ②準備運動
- ③コーンなどを用いた基礎的なスキルの練習
- ④シュート練習
- ⑤ディフェンスを置いたシュート練習
- ⑥1対1、1対2、2対3など対人的なスキル練習
- ⑦パターンの練習
- ⑧試合形式の総合的な練習
- ⑨整理運動
- ⑩片付け

そして、クラブとして重視している技術は以下の通りである。

「個人技術」

- ①コーディネーション
- ②フィジカル
- ③フェイント・ターン

- ④トラップ
- ⑤ドリブル
- ⑥キック

「試合個人技術」

- ①攻守の切り替え
- ②リスタートの判断
- ③運動量とスピード
- ④ヘッドワーク

今回と同規模の大会が年に2回（8月、1月）におこなわれる。7月には3日間の合宿があり、リーグ戦を含めれば、ほぼ毎月、試合がある。試合には、6年生は全員参加、5年生は、選抜されたものだけが参加する。

指導陣は、クラブの代表と監督、複数のコーチからなり、コーチは、チームの保護者がつとめている。代表の元、レギュラー・チームのコーチは3名、ジュニア・チームのコーチは4名である。コーチにはサッカーを経験したことがない者もいる。また、チームのOBがサポートに参加する場合がある。練習には、彼ら以外に保護者がサポーターとして交替で参加し、物品の管理や夏季の給水、試合後におやつを配るなどの活動を行っている。

クラブのHPには、「サッカーを愛する児童が、練習および試合などを通して、ルールを正しく理解し、スポーツに親しみ、友情を深め、もって青少年の健全な育成を目的とする」と記されており、われわれが行った聞き取り調査においても同様の点が強調されていた。

4. 結果及び考察

(1) コミュニケーションの種類とその意味

大会当日の前におこなった練習の観察の結果、コミュニケーションの種類として、以下の点が抽出できた。これらは、大会当日の撮影と観察のポイントとして活用した。

1) 発話かそれ以外

発話としては、試合前やハーフタイム、選手交代時の指示、そして、試合後の評価などがあった。

発話以外の働きかけとしては、ストレッチなどを行わせたり、サイキアップのためのレク・ゲームを行なわせたりということがあった。

2) 声かけに対する呼応の有無

監督やコーチによる声かけについて、「ベンチで呼応があるもの」「選手で呼応があるもの」「選手間で呼応があるもの」が見られた。

選手による声かけについても、「単発に終わるもの」「選手による呼応があるもの」「選手間で呼応があるもの」が見られた。

3) 評価語

プレイに対する評価語としては、「コーチ・監督によるもの」「選手によるもの」「観客（父母など）によるもの」があった。

なお、声かけの内容は、ポジションについての声かけ、マークについての声かけなどであった。

以上の観察では、このチームにおいて、監督やコーチが、選手同士の声かけを重視していることが分かった。声かけの重要性は、実際に撮影されたデータにおいても、監督やコーチによって、幾度も指摘されている。

サッカーをする少年少女たちは、サッカーという運動の特性や魅力を十分に味わうことで、サッカーという文化の意味を自らのものにすることができる。サッカーの醍醐味は、足でボールを扱うという技術以外に、多くの人とコミュニケーションを取り合うということにもある。コミュニケーションのなかに埋め込まれた技術の「意味」を生き生きとしたものとして活性化させることで、サッカーに必要な「技能」「態度」「指向・判断」を獲得することができる。

声かけというコミュニケーション上の道具を使うことは、その場の意味を確認、再確認し、その場での経験に意味を与えることである。意味ある経験を通じた知識、技能などの再構成がなされるのである。

生田もいうように、「わざ」＝技能は、身体の動きだけによって示されるのではなく、自らの動きについて「説明すること」もその重要な構成要素である（生田1987）。声かけは、複雑な論理構造を持つ「説明」とは言いがたいが、そこで起こっていることが何か「一目で分かる」ようにする「説明可能性」を持つ（前田・水川・岡田 2007）。

先に述べたように、これまでスポーツ場面のコミュニケーションの研究での、第1の側面は身体的な訓練を重視する行動主義的な学習論に結びついており、第2の側面は表象とその操作を重視する情報処理モデルと整合的である。しかし、声かけは、実際の相互行為が生み出されている文脈において発生し、相互行為を取り巻く他者や人工物といったリアルな社会・文化的状況を考えに入れた状況（論）に応じて行われる。自らの動きについて「説明すること」と声かけとは、深く結びついた能力であるように思われる。

このように学習者が実際に経験する、自らの振る舞いを状況と適合させていく過程を学習と捉える学習観を、体育（科教育）においては「構成主義的学習観」と呼ぶ。技術や戦術についても、試合という変化する状況の中で、各人の技能を状況に応じて活用することが学習の目標になる（松田・山本 2001）。本調査は、このような学習観のもとに行われている。

（2）コミュニケーションの実際とその考察

撮影をおこなった調査日の進行と分析した場面①～③について概説する。

対象チームXは、朝8時過ぎに通常の練習場所であるα小学校に集合し、1キロほど離れた隣のβ小学校に移動した。Xのメンバーはコート南側の集まった。9時30分からの第1試合が行われているときに校門側のスペースに集まって、ミーティングが行われた（データ①）、その後、何人かの選手に個別のアドバイスがなされ、試合前のウォーミングアップが行われた。

午前の予選では、Xチームの試合は、第2試合と第3試合であった。ベンチは、西側のベンチとなった。ピッチ内でウォーミングアップの後、輪になって、監督から選手たちへ言葉がかけられた。その後、選手たちは順に声を掛け合った（データ②）。ウォーミングアップの内容は、パスの交換、鳥かごと呼ばれるアウトナンバーゲームなどであった。ゴールキーパーは別メニューで調整していた。当日背番号をえた15名の内訳は、6年生が10名、5年生が5名であった。先に述べたようにこのチームの6年生は、10名であり、全員が何らかの機会に試合人参加した。

この大会への参加チームは、9チームであり、午前に行われる予選リーグは、それぞれ3チームからナルA.B.Cの3グループに分かれ、午後の決勝リーグを経て順位が決まる。午前は、第1試合は、2-1で勝利、第2試合は、1-5で予選グループ2位になった。午後の2位リーグでの結果は、第1試合が0-0、第2試合が3-4でグループ2位となり、総合成績は全体の5位であった。

以下では、実際の試合のなかから、スポーツ・コミュニケーションの事例とその考察を示す。

1) 理解の主張と言葉の曖昧さ（場面①）

「理解の主張」とは言葉によって自らの理解を「主張」することであり、正しく質問に答えるか、進んで説明を加えることで成し遂げられる。その際、まず重要なのは、応答の辻褄があっていること（質問に答える、依頼に応じる、など）であるが、発話や行為のタイミングも、同様に重要である。

「…すべし」という規範に関わる知識を確かめるときに顕著なことだが、単純に質問に答えたり、返事をしたりするだけでは、あることを本当に「理解している」とは看做せない。周りの人々から知っていることと本人が知っていることとは、別物である。それゆえ、発話による理解の表示を理解の「主張」と呼ぶ。「本当に」理解しているかは、その都度、「答え方」から推し量るしかない。この理解の「主張」が認められるか否かは、必要とあればそれについて「説明する能力」と切り離すことができない。

場面①

監督 : それは準備が足りないっていうこと
: 自分の中でどうなるかっていうのを
: 考えておかないと

選手達 : はい

監督 : ボールがきてからいつも考えてる。
: それじゃだめだよ
: 周りを見て、ボールが来たらどうしようか、
: 頭のなかで考えておく
: ミッドラーはそうだよ。
: バックもね、バックも
: で周りを使って、声かけて、ね
: 思っていることはゆっていいんだから、
(2.0)
: 自分達で盛り上げて行ってください。

選手達 : はい (声を合わせて)

監督 : 大丈夫、声出せる? ***
(4.0)
: ちゃんと準備だよ、準備、でイメージ
: で、いいんだって、ミスしていいから、
: あの、ほかの、ほかの7人に
: 謝ってくれればhばhだいじょうぶ
: な、ヨシキだってミスをする だけど
: ほかの人をカバーしてくれる
: それでいいんだから 一人の失敗で
: 入らないって、一人が失敗して、
: みんながサボってたらはいっちゃうけど
: だから思いきってやればいいんだ出た奴は

選手x : はい

選手達 : はい (声を合わせて)

監督 : ね、で、楽しんで

選手 : はい

監督 : じゃ、目を瞑って
: はい、二対ゼロで負けています。
: ええあと五分しかありません
: 自分のなかで考えてください
: 五分しかないけど、五分もある、三点、三点
: 一分に一点入れたら、五点入るんだ
: 考えよう考えよう、どうすればいいか
: どうすればいいか、相手に、
: 相手が追加点ねらって
(10.0)
: イメージできた?

選手A : いま点はいった。

監督 : はいった? いれられちゃったの

選手 : いれた

監督 : だれが

選手A : おれがナルオにねパスして

選手B : むかつく

選手C : 逆じゃねえの

監督 : お前が点取れよ

選手A : それで俺がなかに切り込んでって
: ナルオにパスしてヘディングでおれがゴール

選手x : あ、もう一点は、

選手B : 左だから

監督 : おれらの、気持ちよくなパスサッカーしよう
(9.0)

監督 : で、コーナーキックもスローインも
: そうだけど、動くことね
: 一人ではずせなかったら回り使ってね

選手x : はい

選手達 : はい

選手A : いまね

監督 : だいじょうぶだよ

選手A : もう一点はね

監督 : お前らの場合は一点取られると焦るけど、
: 焦んなくていいから
: でひよっとしたら、途中で試合の中で
: ツーバックにするかもしれない、
: ツーバックにしたとき、ヤスシ、
: ボランチに入ってね
: ヨシキ、ヨシキ、ツーバックの時
: トップ下にはいって

選手B : ツーバックにしたときヤスシが入って
: ヨシキがトップ下***

監督 : で、自分たちで話し合ってね

選手x : はい

選手達 : はい

選手 : こんにちは (通行人に挨拶)

監督 : こんにちは
: でベンチの人たちも声出して
: 思ったことは言ってあげればいから

選手x : はい

選手達 : はい

監督 : 言ってあげて、みんなで戦うよ

選手達 : はい

【凡例】

(X.Y) = X.Y 秒の無音を示す

はい = 太字の部分は、特に大きな音声を示す

*** = 聞き取れないが発話がある状態を示す

以下の発話データにおいても同様の表記法を用いて示す。

2) 理解の主張の達成、その1 (場面②)

次に、場面② 「輪になって手を繋いで」を見ていく。

場面②

監督：だいじょうぶ一人じゃない、みんないるから大丈夫、声だしていこう
 選手10：ゴウタから（2番の選手名）
 選手7：絶対勝つぞ
 選手達：おお
 選手X：集中
 選手達：おお
 選手2：先一点
 選手達：おお
 選手5：俺か。絶対勝つぞ
 選手達：おお
 選手18：先一点
 選手達：おお
 選手F：優勝するぞ
 選手達：おお
 選手6：気合入れて
 選手達：おお
 選手3：先一点
 選手達：おお
 選手1：(3.0)絶対勝つぞ
 選手達：おお
 選手13：絶対勝つぞh（弱い声で）
 選手達：おお
 選手9：点差付けるぞ
 選手達：おお
 選手5：集中
 選手達：おお
 選手10：絶対点入れるぞ
 選手達：おお
 選手11：集中して、声だしていこ
 選手達：おお
 選手8：声だして
 選手達：おお
 選手7：先制点
 選手達：おお
 選手X：声だしていこ
 選手達：おお
 選手10：最後の締め
 選手2：先一点
 選手達：おお
 選手7：最後円陣組もうぜ
 選手2：絶対勝つぞ
 選手達：お一、おお

これは、監督のいう「みな」と「声を出す」ということへの理解を選手たちが実演する場面である。

ここでは、順に叫ばれる、試合での目標や留意点に「おお」と「皆」が同時に、大きな「声を出し」応答することで、目標の共有が主張されている。選手たちが目標の妥当性を評価しあっていることは、前の人と同じ言葉を続けるときの見られる「躊躇い」「自信のなさ」「はにかみ」「わらい」といったものの中に見て取れる。

3) 理解の主張の達成、その2（場面③）

次の場面も、理解の主張が達成される場面である。場面③「指示の途中で、注意され、叱られて、最後に指示を完遂する場面（13:48分～からのセグメント）」

場面③

代表：分かっててなんでやらないんだって
 監督：ふたり、声でない、だせない、
 : 指示の声がないよ、二人が
 代表：かえればかえればいいよ、
 : そういうやる気のないやつは
 監督：ねえ、でないんだったら、でないって行って、
 : じゃかえるよ。ねえ
 : おまえらが、三人が、協力しないと、
 : どうしようもないんだよ、ねえ
 [今日の試合みてるとお前ら
 二人ぜんぜんこえだしてない
 よ
 代表：ヒロシ後半 [そんなにおまえ出ないんだから*
 監督：ねえ、指示出した、なかまに
 : で、だれかが、だれかがもらうとき、
 : フリーだったらフリーって言って
 : あげたらいいじゃん
 選手X：はい
 監督：ねえ、そんなに、それも疲れてる
 : こえだしてあげようよ、教えてあげようよ、
 : そいつに、で、ボール浮かせすぎ、
 : おまえらそんな身長高いわけじゃないんだから
 : で浮いたボールって処理しづらいでしょ
 : じゃ足元にちゃんと、おちつけようよ
 代表：相手のペースなんだよ
 : 相手のドッカンというペースなんだよ、
 : それ、ねえ、合わしちや駄目、合わしちや、
 : 自分達のサッカーやらないと
 : うちのどういうサッカーやってんの。ん？
 : パスだろ、つなげよ、なんできるのにやらない
 ヒロシ：落ち着こう
 : 浮いてるボールまず落ち着かせてから
 代表：お前が一番落ち着いてくれよ、お前が
 セイジ：守備ん時にヤスシがさ

: ディフェンスのほうついてくれてるとき
 : ヒロシさまんなかぼっかり空いてるから
 : ちょっとさがってきて
 : そこにおち、こぼれたボールヒロシ拾ってよ
 代表: だったらもっと言えばいいじゃん、
 : プレー中に、んん
 監督: いいんだよ、全然
 代表: ゴウタ、声でるか? ソラは? 聞こえないな
 だめか? かわるか
 監督: 声だせ
 代表: ソラだめみたい、だめか? きこえないなあ
 ソラ: だいじょぶ
 代表: じゃ、こえだしてくれよお
 : ねえ、みんな、出たいやついっぱいいるんだよ、
 : あそこに
 監督: とれるよ三点
 代表: とれるとれる、いけるいける
 監督: (ほぼ同時) チャンスないわけじゃない。
 : まだだいじょぶ
 代表: ユウ、調子わるいのか? なんか動きが悪いぞ
 : ヒロシがけたときに、
 : ヒロシがハイボールけたときに
 : 来るとして走りこんじゃう
 : 向こうのヘディング
 : こうやってるから後ろこぼれるから
 : キーパーとヒロシの間にスペースに、
 : お前が入れるスペースがある
 監督: いこう
 セイジ: さん
 代表: さ、いこう
 セイジ: 3人ちゃんとおたがいフォローに入ろう
 代表: いこう
 監督: 右左関係ないから
 : 三人がいろいろと変わっていいから
 代表: ユウユウ、ユウ、動いてだめだったら
 : こっち合図おくれればいいから
 : だめですって (選手達はピッチに)

セイジは、「出鼻をくじかれ」「腰を折られ」ながらも、最後には、「3人ちゃんとおたがいフォローに入ろう」と「おまえらが、三人が、協力しないと、
 : どうしようもないんだよ」という監督の指示に呼応した発話を行う。ピッチに出かける「最後」は、もともと適切かつ最終の発話の機会である。これは、ライルの言う「learn how to do」(やり方を知っている)を越えた「learning to do」(状況に応じてそれができる)としてのコミュニケーション能力の存在を示している (Ryle 1949=1987, 生田・北村 2011)。

4) 好ましい結果を帰結しなかった例 (場面④)

最後は、コーナーキックの場面である。正しい指摘が、好ましい結果を帰結しなかったコミュニケーションの例となっている。

場面④

選手 10 (セイジ) : 10 番、10 番あいてる
 (この後、その 10 番がほぼフリーでダイレクトシュートをし、得点が入る。)

セイジは、身体も大きく、サッカーの技術もすぐれた選手である。キャプテンではないが 6 年生でもあり、このチームのディフェンスの要である。彼は、正しく、相手の 10 番がフリーになっていることを指摘している。見方も、10 番を見るが、それ以外にもマークすべき選手がいたため、十分に 10 番に身体を寄せるといったことはできなかった。結果として、この指示は、コーナーキックを蹴る相手選手に、見方の 10 番がフリーとなっており、そこに蹴れば有利になることを知らせる指示=「声かけ」になった。

セイジは、正しい知識に基づいて正しい声かけをした。自分で判断した正しい指示が、結果として「利敵」行為になったという経験がしたことになる。これは、状況についてのさらに深い理解のきっかけとなりえる。この失敗から学ぶやり方は、味方により具体的な指示をするとか、自分とそれ以外の選手の能力を正しく判断し、自分が能力のある選手のマークにつくほうに動くとか、相手のプレーを止める方法を学ぶといったことが考えられる。

この場面は、正しい声かけへの理解が、振る舞いとして達成されなかった例である。セイジの言葉の意味は、たぶん、周りの味方の多くに認知的は「理解」されていたと思われる。それは、味方の動きや、身体の向きや視線の変化から読み取れる。しかしながらこの理解は現場で「達成」されることはなかった。逆に敵は、セイジの言葉を理解し、理解を「達成」しているのである。

「理解の主張」「理解の主張の達成、その 1、その 2」「理解の達成の失敗 (敵による理解の達成)」の事例を見てきた。それぞれがスポーツ・コミュニケーションの実例である。スポーツを行うこと以外に、スポーツを見ること、スポーツを支えることの意義が言われるようになってきた。内実のあるスポーツ振興の前提には、まず参加者がスポーツの醍醐味を味わうということがあるだろう。そのさい、スポーツ・コミュニケーションの能力を身につけ、高めていくことが期待されているはずである。このい

わば暗黙の前提を実現するためには、スポーツ・コミュニケーションの実態を把握することには深い意義があるように思われる。

5. まとめ

申請時に明記した本研究の特色（独創性）は、

- 1) 現場でのスポーツ・コミュニケーションの実態を把握し、経験的に研究する手法をもっていること
- 2) 市民としての能力（街づくりの能力）にまで発展させるといふ視野のもとで、スポーツを実践する能力を養成するという視点から研究を進めていること

であった。市民としての能力については、現時点では、スポーツ・コミュニケーションが、現場での理解の主張や理解に達成によって成り立っていることを発見し、その具体的な事例を示すという段階にとどまっているが、本研究によって、「構成主義的な学習観」に基づくスポーツ・コミュニケーションの実証的研究が可能であり、この方向で事例を蓄積していくことの意義が確認できた。スポーツ場面における「構成主義的な学習観」にたつ学びの内実を、これまでの教科教育の枠を超えて、コミュニケーションの学習という観点から示すことの意義は大きいと思われる。

ライルが言うように市民としてのスポーツ・コミュニケーションの能力が「どのように成し遂げられているのか」は、具体的に示すことはできない（Ryle 1949=1987）。それは達成という形で、多くの場合、「目に入っているが気づかれないもの」になっているからである（前田・水川・岡田 2007）。本研究では、実際のコミュニケーションの場面でデータを収集し、そこ起こったことを示すことで、その達成の構成要素のいくつかを示すこと、また十全な能力とはみなせない失敗例を示すことで達成の姿を照射することができた。いわゆる質的な分析は、統計的に人々の意見や実態を明らかにしていく研究群とは異なる。人々がスポーツの醍醐味を味わい、ひいてはスポーツ振興に寄与するような、さまざまな活動が達成されていくようすについて、経験に基づきながら、社会的に分析することは、スポーツ振興を推し進めていくときに用いられているさまざまな概念の明確にする作業である。これは、統計的・実証的な研究の推進にとっても有益であると思われる。

スポーツ振興の基礎には、人々が、スポーツの醍醐味を味わうことがあると考えるならば、実際のデータを収集し、そのコミュニケーション現象の意味を明らかにすることは、そうして内実を伴ったスポーツ振興をはかるための基礎的資料となるからで

ある。

今調査においては、スポーツ・コミュニケーションにおける理解の主張、理解の主張の達成、理解の達成が失敗する様子の詳細を示すことができた。これらは、スポーツ・コミュニケーションの重要な構成要素である。今後の、スポーツ振興のためには、スポーツ実践の詳細が明確化され、それに基づいた指導や助言が行われることが求められる、今報告がそのための一助となることを期待している。

参考文献

- 生田久美子 1987 『「わざ」から知る』東京大学出版会
生田久美子・北村勝朗（編著）2011 『わざ言語』慶応大学出版会
前田泰樹・水川喜文・岡田光弘（編著）2007 『ワードマップ エスノメソドロジー』新曜社
松田恵示・山本俊彦（編著）2001 『「かかわり」を大切にした小学校体育の365日』教育出版
日本体育科教育学会（編）2011 『体育科教育学の現在』創文企画
Ryle.Gilbert 1949,1984 The Concept of Mind. Univ. of Chicago Press.= 1987 坂本 百大、井上 治子、服部 裕幸訳 『心の概念』みすず書房

この研究は笹川スポーツ研究助成を受けて実施したものです。

